

見えるが、悲しいときには楽しい音楽でなく、悲しい音楽を聴くことよって癒されることも聞く。それと同様、作者は自らの孤独をあえて確認することにより、かろうじて孤独からの救いを得ているのだ。

6 紫禁城を仰ぎて行けば陽は澄めり一線
の上に次の門次の門 川田順

紫禁城は、一直線上に並んだいくつかの門をくぐって奥へ向かう作り。最初から一番奥の建物は見えないだろうから、「仰ぎて行」くのはその都度目の前に現れる建物のはず。建物を見上げる。空には澄んだ太陽。門をくぐる。次の建物を見上げる。また太陽が目まぶしい。現場で訪問者に時間とともに開示されてゆく城の構造が追体験できるような歌である。結句を「次々に門」などとおさめず、あえて「次の門次の門」と十音もの字余りとしている点が、臨場感のある演出の鍵となっている。

7 翅なき人にしあれば夜ふかく水に舟う
けて月に遊べり 新井洸

「翅なき人にしあれば」とは言うが、本当に空を飛んで月に行きたいのではない。舟を浮かべて水に映る月に遊ぶという行為

は、決して実際に月に行くことの代償ではない。身近な小さな景の中に遠大な世界を想像することにこそ、精神的な遊びがあるのであり、これは枯仙水などの文化にも通ずる。もう一点注目すべきは、三句目。この句は、無くても前後の意味はつながら、あえて置かれていた。句中の「ふかく」は深夜を意味するとともに、水の深さをも表しているようである。ここに、作者が一首にさりげなく仕掛けた深淵が覗く。

8 小鳥きてかたみにくちをふふみあふみ
ちあふれたる愛のしづけさ 柳原白蓮

二羽の、おそらくは雄と雌の小鳥が互いに嘴を含み合った、というだけの内容の歌だ。しかし、この一首の肝はその表記にある。二句から四句までの十九字の中で、「ふ」が四字、「み」が三字、「た」「ち」「あ」がそれぞれ二字。そしてこの部分は全てひらがなである。同じ字の多用とひらがな表記とが相まって、歌の中間部分がその意味を超えて、形の上から甘くとろけてゆくような、独特の効果を生んでいる。

9 この花は受胎のすみしところなり雌蕊
の根もとのふくらみを見よ 木下利玄

花には「受粉」の語を用いるのが普通だろう。それを作者はあえて「受胎」と言っている。人間も植物も、同じ生物としてどこか遠いところでつながっている。新しい生命を宿すふくらみは、人にも花にも共通だ。かかる共感を作者は「受胎」という言葉の選択により表現したかったのだ。

10 捨てられてなほ咲く花のあはれさにま
たとりあげて水あたへけり 九条武子
花に対する優しい気持ちを感じた歌と読みたくなるが、果たしてそうだろうか。捨てられた花にまた水を与えているのは作者自身。だとすると、自らの優しさをアピールするような歌になってしまう。捨てられた花は、生け花で使わなかった部分の花でもあろうか、いずれにせよ作者が捨てたものに違いない。ならば、本来きつぱりとあきらめるべきもの。それをまたとりあげて水を与えるという、自身の心の揺れやすさ、優柔不断さを詠った一首と見たい。